



## 国際基督教大学大学院 IB教員養成プログラム IBワールドスクールとの連携を通じた学び

### はじめに

国際基督教大学の国際バカロレア（以下IBと略記）教員養成プログラムでは大学院の2年間でミドルイヤーズプログラム（MYP）とディプロマプログラム（DP）について深く学ぶことができます（学部4年間と大学院1年間の5年プログラムもあります）。本プログラムの強みは時間をかけてIBを根本から学ぶことですが、理論をどのように日々の実践につなげられるかを学ぶためにもIBワールドスクールとの連携を大切にしています。講座『IB教育入門』ではIBワールドスクールの見学、そして『IB認定校での教育実習』では約3週間の実習を行います（実務者コースは免除）。

IB教員養成の学生たちにとってIBワールドスクールでの経験はかけがえのないものです。IBを学び始めた学生の中には「IB生がどのように学んでいるのかイメージが湧かない」と口にする者もいます。「百聞は一見に如かず」とはこのこと。こうした学生の多くはIBワールドスクールを一日見学するだけでイメージがかなり湧いたと話します。それだけIBワールドスクールを見学することはインパクトが強いのです。授業の一環として実施した見学や実習では全員で気づきを共有するため、一人で見学するよりも多くの発見があります。

実習はIBワールドスクールに学生を受け入れていただいで実施しております。この実習は学生たちが得るものが多いのはもちろんなのですが、実習先の先生方からも実習をご自身の振り返りの機会にいただいているとのことのお声もいただき、大変ありがたく思っています。

このような見学や実習の他にIBワールドスクールと共に学ぶ機会もつくるようにしています。今回は大学での講義とIBワールドスクールでの授業参加が有機的につながり、より大きな学びをもたらした事例を受講生たちが受講時に記述した振り返りを引用しながら紹介します。

### IB教員養成プログラムにおける知の理論（TOK）の活用

本プログラムではディプロマプログラムの必須科目の一つである知の理論（Theory of Knowledge、以下TOKと略記）を学びます。IB機構の発行する『知の理論（TOK）指導の手引き（2022年第1回試験）』（以下手引きと略記）によると、TOKは「知識の性質と知るプロセスを探究し振り返る機会を生徒にもたす」ことを目的としています。生徒は2年間にわたって「知識に関する問い」と呼ばれる「知識そのものについて疑問を投げかける問い」の探究をします。

今回は『国際バカロレア教育における指導・学習・評価：MYPとDP』という授業でTOKを活用した事例を紹介します。受講生は授業当初の学習目標としてTOKを学ぶことを通して「自分自身が知識とどのような関わりを持っているのかを言語化すること」、「どのように言語教育につながっているのか」を考えられるようになること、あるいは「私自身が、何を、どのように学んでいるかを振り返ることができるようにする」ことなどを掲げていました。さらに「『思考することが楽しい』ということ、もしくは『楽しい』とまではいなくても『意味がある』というように捉えることができる授業とは、どんな授業なのかを考えていく」ことを目指していました。

授業では受講者一人一人が『手引き』から「知識に関する問い」を選び、順番に選んだ問いについて話し合いました。話し合いの観点は次の3つです。

1. なぜこの問いを選んだのか
2. この問いに関してわかるところとわからないところ
3. この問いに答えることは「知る」ということ、自分の担当する教科の目標を考えることに

どのように貢献するか？

今年度の学生は全員が外国語教員を目指していたため、学生とは知識と言語に関する問いについて話し合いました。問いを選んだ学生がその日のディスカッションのファシリテーションをします。ディスカッションのあとは個別の振り返りを実施しました。こうしたディスカッションを経て学生たちは「『ぐるぐる考える』というプロセスがTOKなのだろうとわかった」といったTOKを学ぶ学習者としての気づきを振り返りに記述していました。

## IBワールドスクールのTOK活動との連携

この授業実践を経た受講生は、さいたま市立大宮国際中等教育学校6年生（ディプロマ2年目）の齋藤優気先生が担当される、TOKの授業に参加させていただきました。

齋藤先生の授業では生徒が選んだ「知識に関する問い」を皆で話し合うという活動をしていました。2025年10月15日、高校生の皆さんの3~4名のグループに本プログラムの学生が1~2名加わらせていただき、オンラインでディスカッションに参加させていただきました。

本プログラムの学生は高校生のみなさんに少しでも有意義なフィードバックをできること、そして教員の卵としてディスカッションをファシリテーションすることをめざして臨みました。

学生たちにとって高校生たちとディスカッションをしたことは大変インパクトがあったようでした。学生の一人は振り返りで大宮国際中等教育学校の生徒たちが「『これは方法とツールの観点で話そう』や『これは範囲の枠組みで話そう』などとTOKの枠組み」を用いてディスカッションしていたこと、また「ディスカッションが最後の10分くらいになったときに『そろそろ収束するか』と1人の生徒が言って、さまざまな意見が飛び交っていた議論をまとめていた」ことが印象的だと語っていました。また議論は収束の仕方が大切でありTOKでは「議論の中で出たさまざまな意見をまとめる力もつく実感した」ようでした。

TOKの7つの評価目標の3つはディスカッション（議論）に関するものです。評価目標はディスカッション（議論）を構築し、裏付け、その意味を考えることができることに関わっています。したがってTOKはIB教育においてディスカッション力を培う役割を担っているともいえます。IBワールドスクールのTOKの授業に参加する機会を得ることで、学生たちはディスカッションのファシリテーションについてより実際の授業の状況を想定して話し合うことができるようになったのではないかと思います。

学生たちのDP生たちとの学びはディスカッションのみならず、IB教育についての理解、そして教員としての生き方についても振り返る機会になったようでした。TOKの「共通した問いについて様々な科目の視点から考える」ということは、教科間連携においてもとても重要な役割を果たすだろうということがわかった」という理解を持った学生もいたようでした。

さらに学生はTOKが生徒、そして教員の生き方をも問い直す学びをもたらすことにも言及しています。ある学生はTOKは「生徒は人生の教訓を得られる科目なのではと考えた」と記述しています。また教育者にとってのTOKの意味についてもある学生はつぎのように指摘しています。学生の振り返りのあらましをご紹介します。

授業内でのディスカッションを通じて、教員自身も探究者である姿勢を示すことが（IB学習者像の）Open-mindedの模範像として生徒にも映るのではないかと考えました。教師が一つの答えや見方に固執せず、他者の考えや文化的背景を尊重して理解しようとする姿勢を見せることで、生徒も自分と異なる考えを受容し、柔軟に考えること学べるのではないかと考えた。そしてまさにこれこそがIBが目指す国際的理解だと思った。

IB教員になるためには教科目標の深い理解が不可欠です。同時に、生徒には教科を超えた学び、そして学びの過程を言語化することを促す指導方法を獲得することが大切です。TOKのディスカッションはこうしたIB教員に必要な資質を養う一助になるのではないかと考えています。

## 終わりに

以上国際基督教大学のIB教員養成プログラムで実施したIBワールドスクールとの連携を紹介しました。IBワールドスクールとの連携の輪が今後より広がることを願っています。現職教員でIB教員養成の授業を受講された後に現場に戻られた方に、本プログラムでの学びが現在の授業づくりにどのように反映されているのかを伺ったところ、次のようなコメントをいただきました。

視野が大きく広がったということでしょうか。授業をしていますが、この活動の目的は何か、ということについて、以前よりも深い見通しを立てられるようになったと感じます。また、概念や探究テーマの視点から教科を捉えることで、教科間の横断性をより意識できるようになったとも感じております。(略)

IBについて学ぶことは学習指導要領とは異なるアプローチを知ることであり、それはIB校であるかどうかに関わらず、教員の資質向上に与するものであるという考えが確信に変わりました。

本プログラムはIBワールドスクールの皆さんにとっても教員としてのスキルを育成し、振り返る機会を提供できる場になればと思っています。

## 引用文献

国際バカロレア機構(2020). *ディプロマプログラム (DP) 知の理論 (TOK) 指導の手引き 2022年 第一回試験*. (2020年版 英語版2020年発行)